

# HIMALAYA

**ヒマラヤ**  
**No.353**



**2001 APRIL**



**日本ヒマラヤ協会**  
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 2002年H A J 登山隊隊員募集

## 八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（JAC）、97年K2西壁上部（JAC東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・オユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央部に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだ

ろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちもそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。中央峰の標高が8,000mを切ることも有りえない訳ではないだろう。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的な困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えています。意欲ある岳人の参加を期待します。

記

1. 時期 2002年秋 50～60日間程度
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

### 表紙写真

ホンゲー氷河からのバルンツェ（7,129m）

バルン氷河とホンゲー氷河の分水嶺をなすどっしりとした山だが、高い峠を越さなければ見る事ができない不遇の山である。

2000年秋、京都と福井のクライマーが写真の右の稜（南稜）から登頂した。

（文・写真：林雅樹）

## ヒマラヤ No.353

- |                                   |                |
|-----------------------------------|----------------|
| 1. PEOPLE                         | アンドレア・シュトレムフェリ |
| 2. バルンツェ (Baruntse 7,129m) 登頂記    | 林 雅樹           |
| 13. 氷河の旅① ハラモシュ・ラを越えてー2           | 東野 良           |
| 20. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 |                |
| 22. 7,000m峰以上の複数登頂の変遷             |                |
| 24. 寸感・事務局日誌                      |                |

## PEOPLE

1979年春、東欧はユーゴスラビアから意欲的な登山隊がネパールにやって来た。トーネ・シュカリャ隊長に率いられた25人が目指すのは、世界最高峰の未踏ルート「西稜」である。その末端から頂上までを登ろうと言うのである。

その中にマルコとアンドレアのシュトレムフェリ兄弟もいた。二人は、第一次と二次隊がそれぞれ8,300m地点で登頂を断念したため、三次隊としてナイツ・ザプロトニクと3人で頂上アタックに向かった。しかし、兄のマルコは、酸素補給器の具合が悪くて途中で断念。残る二人は困難なV級IV級の難所を突破して遂に世界最高峰の困難な新ルートから登頂に成功したのである。当時、この登攀はポーランド隊の「冬」の世界最高峰登頂と共に世界登山界から絶賛されたのであった。

アンドレアは、75年カフカズで高峰登山の洗礼を受け、77年ガッシャーブルムI峰に西稜ルートを開いた。そして、79年の快挙である。その後の活躍振りは右の登攀歴が示すとおりである。

今回の来日は、日山協が毎年開いている「海外登山技術研究会」の招きにより実現した。ユーゴスラビアから分離独立したスロヴェニア人。ヒマラヤでの活躍の割には日本では知られた存在ではなかった。その海登研では250枚に及ぶスライドを駆使して自分のヒマラヤ&登山に寄せる思いのたけを十分に語り、参加者に感動を与えた。

美しく陽気なマリア夫人を同伴しての来日であったが、夫人もアルピニストでアンドレアと三度八千メートル峰の頂上に立っている。

アンドレアは、マナンの登山学校時代に習得したといいながら箸を苦も無く使いこなし、夫人は苦勞しながら箸使いに挑戦していた。20歳、17歳と何故か30ヶ月の3人の子供がいる。お二人とも教師をしており、ちょうど冬休みと重なり来日を実現した。富士山に登頂し、爽やかな印象を残して2月21日に帰国の途に着いた。

アンドレア・シュトレムフェリ (44才)

1956年12月17日生まれ 3児の父



- 1975 カフカズ遠征
- 1977 ガッシャーブルム I (8,068m) 西稜初登攀
- 1979 サガルマータ (8,848m) 西稜初登攀
- 1981 ローツェ (8,516m) 南壁 8,200m まで
- 1983 アンナプルナ I (8,091m) 南壁  
イスモイル・ソモニ (7,495m)
- 1985 ダウラギリ I (8,167m) 東壁初登攀  
ネパールのマナンにユーゴスラビアの援助  
で設立された登山学校にリーダーとして参  
加、指導に当たる。
- 1986 ブロード・ピーク (8,051m) (夫妻登頂)  
ガッシャーブルム II (8,035m) 登頂
- 1987 ローツェ・シャル (8,400m)
- 1988 K 2 (8,611m) マジック・ライン 8,150m
- 1989 シジャバンマ (8,027m) 南壁 アルパイン・  
スタイル初登攀
- 1990 サガルマータ (8,848m) (夫妻登頂)
- 1991 カンチェンジュンガ南峰 (8,476m) 南稜ア  
ルパイン・スタイル初登攀
- 1992 メンルンツェ (7,181m) アルパイン・ス  
タイル初登頂  
マナン登山学校インストラクター
- 1995 パタゴニア遠征  
チャー・オユー (8,201m) (夫妻登頂)
- 1996 アビ (7,132m)、ナンパ (6,755m)、ボバイ  
エ (6,808m) 新ルートを試みる。
- 1999 ギャチュン・カン (7,952m) 北壁アルパイン  
・スタイル初登攀
- 2000 ジョンサン・ピーク (7,483m)

# バルンツェ (Baruntse 7,129m) 登頂記

KFバルンツェ登山隊 林雅樹

## はじめに

1999年の秋'91年のH A J ミニヤ・コンカ隊以来の友人である松田氏より2000年にどこかへいかないか？と誘いを受けた。ちょうど1年ブランクのあった私にとっては願ったりかなったりの話で他に福井のメンバー2名も加わり3月には隊編成はできた。準備の関係もあり山の選択はネパールにしばり、山の高さよりもこの近年に日本隊が入山していない山を中心に調べて「バルンツェ」に決定した。バルンツェはクーンブ山群東部に位置しホンゲー氷河の源頭にありバルン氷河との分水嶺をなす美しい山である。1954年にニュージーランドのE・ヒラリー率いる隊により初登頂され、その後日本隊では'64年に立教大学隊が試登'80年秋には宇都宮大隊、同年冬に北大隊そして翌'81年には千葉大隊と立て続けにいずれも南稜から登頂している。しかしその後19年間忘れ去られたかのように日本からは登山隊はない。アプローチが長い事と山の写真等があまり一般に見る機会が少ないことがこの山の認知度を下げているのだろう。しかし近年欧米からはこの山への入山が増えており実は今ネパールで最も入山の多い山のひとつである。今回私達は初登された南稜をルートにとった。バルンツェのBCはルクラからザトルワラ、メララを越えホンゲー氷河上部に建設するものと、ヒレもしくはツムリントールからアルン川沿いに入り、バルン氷河上部に建設するものの2つがある。どちらも10~12日の行程で、前者は距離は短い5000m前後の峠を2つ越さなければならないし、後者は距離は長いシプトン・ラが4000mある以外は初期順化の点では比較的楽だ。私達は今回高所未経験の隊員のことを考慮し後者をとることにした。20年前、BCはバルンボカリという大きな氷河湖畔の緑地に作られていたが今はその面

影は全くなく、バルンボカリは地図上にのみ存在しているだけでバルン氷河は不安定なガレの山と化している。BCは対岸にマカルー、氷河上流にサガルマータ、ローツェ、ローツェ・シャルなどの見える素晴らしいロケーションだが、残念ながらこちらのルートからはバルンツェの全容は見えない。ヒレの標高が海拔200m程、そこから1ヵ月もアプローチをこなしてこの山に挑んだ先人達の偉業を改めて感嘆させられた。

## 登山隊の構成

隊長 林 雅樹 (37) 京都クライマーズクラブ  
副隊長 松田靖彦 (41) 福井山岳会  
隊員 竹内和司 (37) “  
隊員 東 治 (32) “  
連絡官 トゥラシィ・バラサド・カレル(年令未詳)  
サーダー アンプー・リー・ラマ(52)  
コック ダワ・ラマ(34)  
キッチンボーイ バル・クマール(28)  
ナイケ バウラ・グルン(27)  
ローカルポーター 往路 55 名  
復路 15 名

## 行動日誌

### ■ベースキャンプを目指して

9月16日 くもり→晴れ→雨  
カトマンズ→ツムリントール (400m)

既に9月11日にコックのダワをリーダーとする先発の陸路隊がカトマンズを出発している。2日間のバスの移動と3日間の暑い中のキャラバンでツムリントールに着くのだ。私達は必要最小限の個人装備といたみやすい野菜や卵を持ってエアポートに向かう。隊員4名とLO・サーダーの6名は

カトマンズから飛行機で40分でツムリントールに到着。先発隊と無事合流できた。ここは標高400m、バナナの樹が繁茂する穏やかな田舎村。ここから私達のキャラバンが始まる。

9月17日 くもり→晴れ→雨

ツムリントール→カンドバリ→マニベンジャン (1100m)

7時40分出発。早朝だというのにこの標高では暑く、全身から汗を吹き出しながら穏やかな農村地帯を歩く。カンドバリは、何故こんな山奥に在るのかと驚くほどに大きなバザールでここには大学までであるという。キャラバン初日、皆久しぶりにつく荷物に少々バテ気味になった頃、本日の目的地マニベンジャンに着く。(13:00) このアルン川沿いの集落では、電気はここまでで終わり。この先にはもう冷蔵庫も電話も何もない。

9月18日 くもり→晴れ→雨

マニベンジャン～ポテバシ～チチラ (1980m)

昨夜の豪雨の為か半ば川となった道を進む。マニベンジャン (7:45発) からしばらくは水田のあぜ道のような所を歩き、樹林帯に入るとポテバシの峠まで急登が続き高差900mを一気に登る。峠からは穏やかな登り下りでチチラに着く。(13:15) チチラには泊まれるバッチェが無くテント泊。早くもL・O・林・竹内はズガ (山ヒル) の洗礼を受ける。

9月19日 雨→くもり→雨

チチラ～デオラリ～ヌン (1500m)

朝から雨。7:10チチラを出発。うっそうとしたジャングル帯の通過はズカに気を取られ疲れてしまう。道の下草の先には無数のズカがダンスをしてかまえている。恐ろしい光景だ。今日の行程は地図上ではほとんど穏やかな登り下りになっているが実際はほとんど登りで直前に急降下してヌンに着く。(13:25) この村の周辺にはあわ畑が多く村にはロキシーの工場がある。ヌンはこのキャラバンで最も旨いロキシーが飲める村らしい。

9月20日 雨→晴れ→雨

ヌン～セドア (1580m)

7:10ヌンを出発。今までかせいだ高度を吐き出すようにアルン川に向かって下って行く。傾きかけた吊橋 (標高約700m) でアルン川の激流を渡

### ▼ヌンの吊り橋



り、再び猛烈な暑さの中の急登で800mほど登りセドアに着く。ここで国立公園の管理事務所があり入園のチェックを受ける。(12:30) 学校の隣のきれいなロッジに宿泊。窓にガラスが入っていないので風があると寒いが、この行程中最も心地良いロッジだった。

9月21日 くもり時々雨

セドア～タシガオン (2100m)

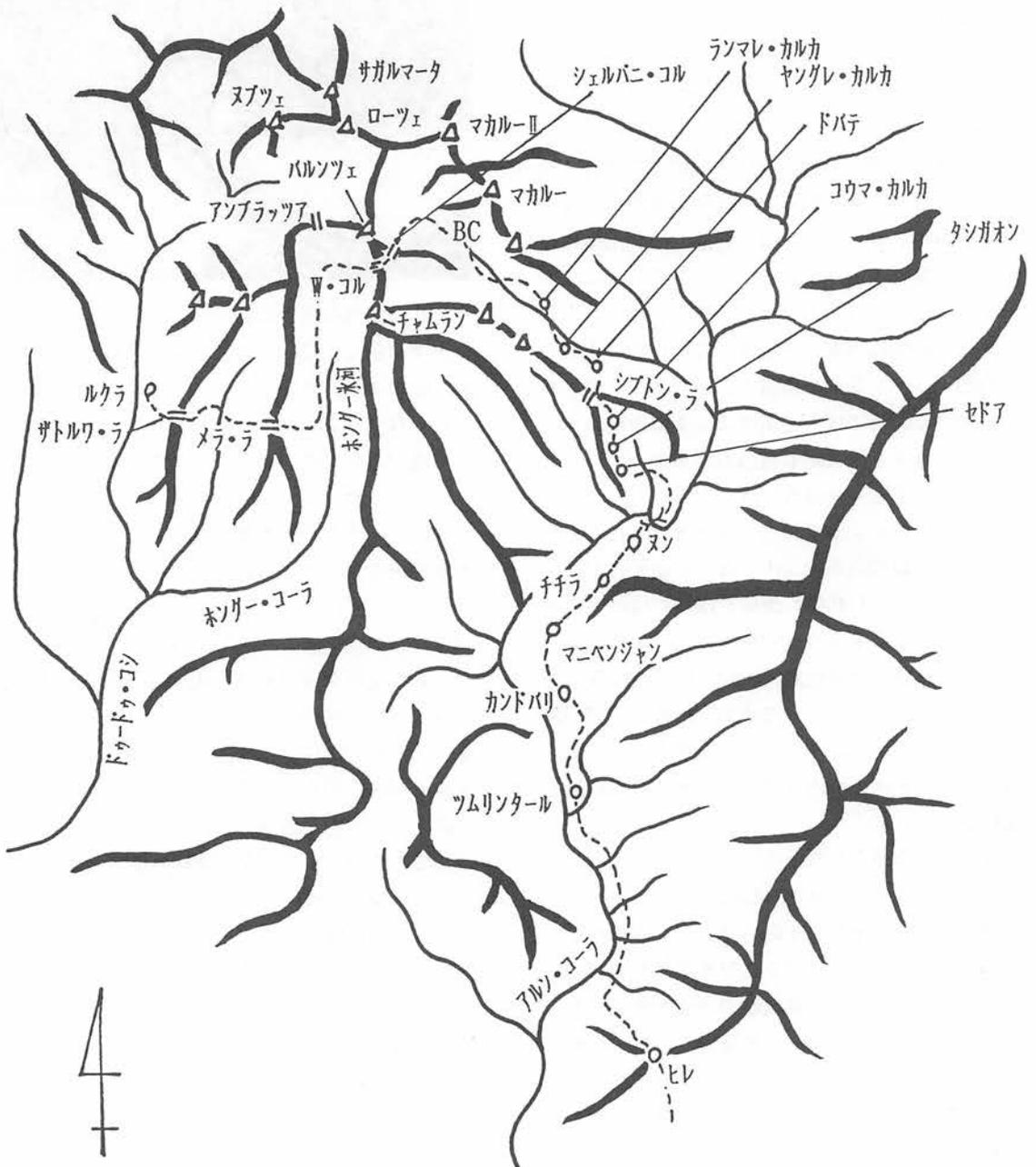
今日の行程は短かった。でもズガの数は半端ではなく、ズガチェックの為に何か別の疲れ方をした。この辺のズガはチチラ辺のズガより小さく、下草ではなく地面にいて靴底からはい上がって来る。10分歩けば片足に10匹はくっついている。マカルーバスと言われる所に新しいゴンバがあり、寄贈をして登山の無事を祈祷してもらおう。ここから30分でこのキャラバン最奥の村タシガオンに着く。(11:35) 今夜のロッジはこの春エベレストのネパール人女性サミッターとなったラクパシエルパの家。今夜は病人の為に祈祷する儀式をやるらしく、家の祭壇はバターの装飾品がいっぱい並べられ親戚や友人達も大勢集まっている。下からの念仏の声を聞きながら寝る。

9月22日 晴れ→雨

タシガオン～コウマカルカ (3500m)

ここタシガオン村にも国立公園の事務所があり、ここでポーター1名につき10Rsの入園料が徴収される。同時にポーター達に支給する燃料やケロシンコンロの有無チェックがあり、もしそれが無い隊があればここでコンロをレンタルし、ここで燃料を購入しなければならない。今では燃料として薪を使用する事が堅く禁じられているからだ。

# キャラバンルート概念図



タシガオンから上部へはポーター賃金も変わり、タシガオンからバルンツェBCまで1人3000Rsで決まる。タシガオンを7:50発。朝のうち陽が差していたが途中からどしゃぶりになり休憩を取る気にもならず黙々と登る。樹林帯の急登を越えるとコウマカルカ (12:20)。ここは美しい芝の上のテントサイト。雨でなければ快適な所だと思うが、

雨の為湿地の上にテントを張ったような状態でテントの中もビチャビチャで嫌になってくる。今夜はタシガオンのシェルパニが加わってポーター達は夜遅くまで大合唱で騒いでいる。私達はシプトン・ラ越えに備えて早々と寝る。

9月23日 雨

コウマカルカ～シプトン・ラ～トゥットゥ・ラ～ド

バテ (3700m)

コウマカルカを7:30出発。雨の中を黙々としゃくなげ帯を登る。幾つかの神秘的な湖を越えシプトン・ラ (4100m) に10:30に着く。ここから一度湿地帯を下って再び急登でトゥトゥ・ラ (4070m) を越え、ここからは川になった道を石の上を飛ぶ様にして下っていきドバテに着く。(12:10) 天気が良ければ遠くカンチェンジュンガまで望めるはずのシプトン・ラも雨ではどうしようもない。残念だ。

9月24日 雨→くもり

ドバテ～ヤングレカルカ (3510m)

7:20出発。最初1時間は急な下りで3150mまで下ってバルン川に出会う。しばらくは大崩落地帯となっているため上部からの落石に注意しながら川沿いの道を進む。谷は一度狭くU字状になり、再び開けて右岸に岩峰群を見過すと、前方に広い草原が現れヤングレカルカに着く。(11:30)

9月25日 雨→くもり/時々雪

朝方まで降っていた雨が止み、ガスの切れ間から雪の峰が見えた。6112mの無名峰とピーク5 (6404m) だ。キャラバンが始まって以来やっと見れた高峰の光景に皆、感激。7:30ヤングレカルカを出る。前方の谷をふさぐ段丘状の台地の上がジャッカルカ (4080m) で、そこから広い芝の斜面をしばらく登って目的地のランマレカルカに (4250m) 12:20到着。テントを設営し一休みしてから4400m付近まで順化トレーニングをする。ジャッカルカ付近からは霰が降る中の登行になり、昨夜から軽い高度障害が出始めている隊員にとっては、今日の行程はかなりつらかった事だろう。

9月26日 快晴→小雪

ランマレカルカ～マカルーヒラリーBC (5000m)

本日快晴。待ちに待った山の展望が開ける。昨夜降った雪のおかげでチャムラン東面、ホングーチュリと朝日に輝く峰々が素晴らしい。一方、隊員の方はヒマラヤ初めての竹内・東2名は頭痛と下痢・吐き気に微熱を訴え、とても先に進めそうにない。やむなくふたりを残してキャラバンを進めることにする。ポーターの都合上キャラバンを止めるのは難しい。後日迎えを出すのを約束して、2人にはとりあえずランマレにもう一泊してもら

▼バルン川沿いの道をヤングレカルカに向う



い、上下の順化トレーニングをしてもらおう事にする。2人に薬の使い方を説明し行動の確認をして出発。(8:10) 小さくなったバルン川の広い河原歩きに終始すること4時間半でマカルーのタンマリBC (4700m) に着く。ここは春のマカルーBCになる所だ。もうマカルーは手が届く程まじかに見える。バッチィで茶を飲み一休みして、更に小1時間でヒラリーBC (4800m) に到着。(14:20) 今夜はポーター達の最後の夜、皆キッチンテントに集まって遅くまで騒いでいた。

9月27日 快晴

ヒラリーBC～バルンツェBC (5200m)

林・松田両名も高度障害で朝食が食べられない。快晴の中、頭痛をかかえながら気力で出発 (7:30) 昨日には見えなかったローツェ、ローツェ・シャル、バルンツェ、ヌプツェなどの展望も加わる。大岩のゴロゴロしたサイドモレーン帯に入って間もなく仕事を終え下ってくるサーダー、ポーター達に会う。BCは近いらしい。サーダーはこれから遅れている2名を迎えにランマレカルカまで一気に下る。ヒレから15日間に及ぶ長いキャラバンを不平も言わず荷を運び上げてくれた彼らに感謝しながら見送る。マカルー西壁の真下、バルン氷河の対岸にわずかにできた砂の台地にBCは位置していた。(10:20) 20年前は美しいバルンボカリ畔の草地にBCを作っているが、今はバルンボカリすら崩壊し存在しない。氷河も年々後退しているらしい。ここまで隊に同行してきたLOもBCに着くやいなや写真を数枚撮ってポーター1名と共に下って行った。とにかく無事BCに入る事ができてよかった。

## ■ヒマラヤの空にザイルはのびる

9月28日 快晴

本日、先に着いた林・松田は休養日。それぞれのんびり過ごす。ランマレカルカで別れた竹内・東は4時すぎにサーダーと共にBCに入ってきた。2人は今日一気にランマレカルカからここまで登ってきたという。かなり疲れた様だが何とかこれで全員BCに集結する事ができた。

9月29日 晴れ→雪 BC一日滞在

早朝からサーダーは祭壇作りに忙しい。朝食が済みブジャ（BC開きのセレモニー）の準備が整う。全員揃ってサーダーの祈禱の声に合わせて米をまく。供えられたお酒を皆に小分けして飲み干す。いよいよこれから登山が始まる。夕方から雪。

9月30日 BC～C1 (5650m) 快晴

昨夕からの雪は夜半には止み積雪は2cm位で問題なし。林・松田・サーダー・パウラの4名でC1の偵察と少し荷上げを行う。ルートの初めはバルン氷河に沿って右岸のモレーン上を進む。シェルパニコルに突き上げる氷河に入り、再び左岸のサイドモレーンを登る。所々に残るケルンと踏跡を頼りに登ると、氷河の舌端にタルチョーが残る広い所があり、ここをC1 (5650m) とする。流水もあり、ここをBCとする隊もあるようだ。シェルパニコルのルートを調べる為100m登ってみたが解らず今日はBCに戻る。BC発 (7:45) - C1着 (11:00) - C1発 (13:00) - BC着 (14:30)

10月1日 快晴

全員でC1に荷上げ。BC発 (8:00) - C1着 (11:00～11:30) - C1 (12:20) - BC着 (14:40)

10月2日 快晴

林・竹内・サーダーで荷上げ。松田・東はBCで食料のパッキング作業と整理。

10月3日 快晴

全員休養。

10月4日 快晴

林・松田・サーダー (Aパーティー) でC1入り。竹内・東 (Bパーティー) はC1への荷上げ後BCに下る。今日からパーティーを分けての行動となる。BCに直に入った組は先行しルート工作。順化不十分な2人は荷上げをして順化をさらに進めるよう努める事になった。BC発 (9:10) -

## ▼氷河舌端のC1 (5,650m)



C1着 (12:10)

10月5日 快晴

C1⇄シェルパニコル⇄C2

内院のように岩壁と急峻な雪壁に取り囲まれた、この氷河のどこかにシェルパニコルという、ポーターが安易に越えられるパスが在るはずだ、とその唯一の突破口を捜しながら氷河を登る。氷河の最奥部から稜線上にタルチョーがあるのが確認できシェルパニコルを見つける事ができた。もろいガレ場を所々岩登りをしてコルに到着。標高は6150m、コルからはウェストバルン氷河の広大な雪原とチャムランやホンゲーチュリなどの峰々が間近に見えるが、バルンツェは頂上をわずかに見せているだけだ。Wバルン氷河の対岸にはバルンツェへのトレイルが見えちょうど下ってくるパーティーが見えた。その内の1名が何か私達に合図を送っている。驚いた事にその内の1名がこちらに歩き出しコルの真下に来てしまった。彼はイタリア隊のシェルパで、彼らは早くもバルンツェのナイフリッジに到着したらしいがルートが危険という事で早々に諦め近くの山に転進して帰らしい。私達はコル上で一休みして、コルから懸垂下降2ピッチでWバルン氷河に降り立ち、ちょうど氷河の真中辺りをC2 (6100m) と決めC1に下る。

C1発 (7:20) - シェルパニコル着 (10:30) - C2着 (11:50) - C1着 (13:55)

10月6日 快晴

AパーティーはC2へ荷上げ。BパーティーはBCよりC1入りし合流。昨日登頂計画を見直し頂上アタックは全員で同時に1回で行える様変更した。その結果として順応の遅れている隊員はこ

の先1週間で先行パーティーに追いつけるよう頑張ってもらう事になる。C1発(7:30) - シェルパニコル(10:30~11:30) - C2着(11:25~11:40) C1着(13:45)

10月7日 快晴

今日は全員揃ってC2へ荷上げ。後続のイギリス隊がC1に入ってきた。彼らはシェルパ4名、ローカルポーター・キッチンスタッフも全員C1に伴ない2日後には、そのまま全員でC2に入り10日でバルンツェに登ってそのままWコルを越えて行くと言う。実情C2をBCとするチョット変わった方法で登る予定だと言う。この地では1度ポーターを解雇すると下山時にWコルを越えるポーターを集める事が極めて困難であるためその対策なのであろう。AパーティーはC2荷上げ後休養の為BCに下る。C1発(8:00) - C2着(12:00) - C1着(13:40~14:20) - BC着(15:50)

10月8日 快晴

A・Bパーティー共に休養日。イギリス隊のシェルパからC2にデポした私達の食糧がカラスにやられているという連絡があった。どのくらいの被

▼Wバルン氷河のC2 (背景の山はP4 (6720m))



害があったのかは定かではないがもっとしっかり深く雪に埋めておくべきだったと悔しくて仕方ない。とにかく早くC2に入って状況を確認してはいけない。

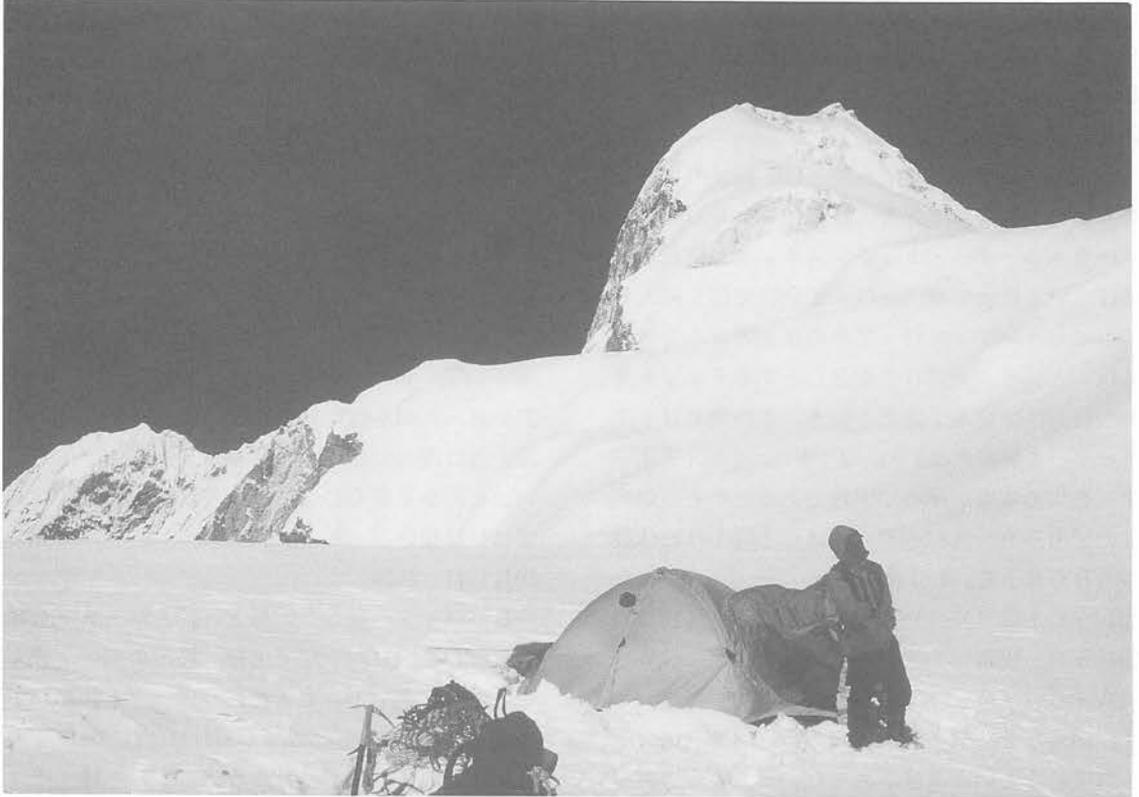
10月19日 快晴

BパーティーはC2に荷上げ。Aパーティーは今日はC2入りの予定で出発。松田の調子が悪くC1の少し上で下ってきたBパーティと共にC1に戻る。C1で1泊後調子が良ければBパーティーとしてこの先行動してもらおう事にする。林・サー

バルンツェ・ルート図



▼C 3 (6500m) からバルツェを見る



ダーはそのままC 2入り。カラスの被害は予想以上のものでC 2の行動食が全く無く、飲料もかなり散乱し使用できないものが多い。C 1・BCの食糧を再度チェックし何とか悪天候などが続かなければ登山可能な食糧があることを確認し安堵する。

10月10日 快晴

Aパーティーは6752m峰と6525mの鞍部にC 3を確定するため登る。予想外に近く1時間半で鞍部に到着。既にドイツ隊とスウェーデン隊のキャンプが在りC 3より上にもトレイルが伸びている。私達の後をイギリス隊のシェルパが登ってきて、ルート仕事を協力しあう相談をしたら、今日私達が荷上げたロープと彼らのロープで充分足りそうだとわかり、この先余計に荷上げる必要は無くなった。どちらの隊が先行してもロープとスノーバーを共有しても良い旨も確認しC 2へ下る。体調が回復した松田を加えたBパーティーはC 2へ移動。正午過ぎにC 2に入ってきた。C 2発(8:20)→C 3着(9:50)→C 2着(10:45)

10月11日 晴れ(強風)

全員揃ってC 3へ荷上げ。BパーティーはそのままC 2に泊まりAパーティーは一気にBCに下る。C 3から下る途中、明日タックするというドイツ隊に会う。イギリス隊も数日中に登ると言う。私達もBCでの休養後は頂上アタックだ。どこの隊も大詰めになって来た。

10月12日 くもり(強風)

BCに入って以来、初めてのくもり空。風も強く寒々しい。BパーティーはC 2からC 3に荷上げた後C 1かBCに下る予定をしていたが、天候悪化の為荷上げをやめ下降。BCに下ってきた。BCではオーストリアのトレッカーグループのひとりが転んで肋骨を折るというアクシデントがありレスキューヘリの要請が大変で一悶着あった。私達も、もし事故があれば大変な場所にいるのだと改めて自覚させられる。

10月13日 晴れ

全員休養。

めっきり気温も下がりBCの流水も少なくなり日中も寒くて羽毛服が話せなくなってきた。山は秋から冬に変わりつつあるようだ。

10月14日 快晴

全員休養。

Wコルからシェルパニコルを越えてシェルパ数人が下ってきた。ドイツ、イギリス隊などの登頂成功を聴かなかつたかと尋ねたがわからないと言う。明日から私達も頂上に向う。先行パーティーがどうであろうと自分らの最善を尽くすしかない。

10月15日 快晴

AパーティーはBCからC2へ、BパーティーはゆっくりBCを出てC1へ入る予定で出発。順調にC1を越えシェルパニコルに着いて呆然とした。急なガラ場にFIXしたロープが無くなりコル上にデボしてあった私達のアイゼンが紛失していたのだ。成すすべなくC1に下る。C1に昨日から入っていたアメリカグループのシェルパに尋ねると昨日彼らが荷上げに行った時はFIXもアイゼンもあったという。すると、今朝下ってきたトレッカーグループ以外に通過した者はなく彼らがロープを外しアイゼンを取ったとしか考えられない。困り果てていると、このアメリカグループのシェルパがアイゼンのレンタルを申し出てくれた。Wコルの後はアイゼンがいらないからウエストコルの下で私達に貸すからサーダーに来てほしいと言う。まさに「地獄に仏」のような申し出に感激する。16:20BパーティーC1着。今夜はBパーティーと共にC1泊。BC発(9:10) - C1着(11:10~11:45) シェルパニコル着(14:00) - C1(14:50)

10月16日 快晴

早朝6時サーダーはアメリカグループと共にC1発。彼らと共にWコル下まで行ってアイゼンを持ってC3に入る。私達4名はC2を撤収し、C3の食糧をプラスして、荷上げしながらC3に入る。Wバルン氷河上には既にイギリス隊もドイツ隊もいない。C3でサーダーと合流。C3も無人のスウェーデン隊のテントと私達のみだった。先行していた隊の結果はどうだったのか気になるが、全員明日のアタックに備えて早々寝る。C1発(9:00) - C2着(11:40~13:15) - C3着(15:30)

## ■バルンツェ登頂記

10月17日 快晴→ガス

早朝2時起床。無風快晴。ゆっくり朝食を摂る。

バルンツェは近く見えるが見えない所に困難なリッジが待ち構えているのだ。絶対に楽々と登れる事をイメージしてはならないと…自分に言い聞かせる。5時、先行に林・東・サーダーのパーティー後から竹内・松田が出る。クレバスがあるかもしれないので、念の為アンザイレンして登る。6900mのショルダーピークまではしっかりとしたトレイルがあり、ただ黙々と登る。この先が核心部分のナイフリッジで、最初はFIXがあり楽々かと思つたが、すぐにFIXもトレイルもとだえ先行パーティーが登頂していない事を知る。(8:00) この先しばらくは最もリッジのやせた部分だ。時間はまだ充分にある。その先私とサーダーでルート工作をしながら登る。雪質が悪く引き返そうかと思うような所もあったが何とか突破でき、8ピッチFIXを足して頂上直下の広い鞍部に出る。もう頂上はそこである。後続2名を待ってまず先行3名が頂上に向かう。かなり風が強くなっている。時折ガスで視界がきかなくなり悪天の兆しが出ている。2度ほどショルダーピークに騙された後、バルンツェの頂上に着いた。(14:20) 風が強いので頂上では写真を撮り早々に下る。20分程して後続2名も登頂。FIX末端のコルで下りてくる2名を待ってからひとりずつ順に下降に入る。ナイフリッジはFIXがあっても下降にも神経を使う。カラビナの掛け替えに細心の注意を払い一步一步慎重に下る。

FIXの下端につく頃には完全にホワイトアウトになり、雪面に残された自らのアイゼンの跡を頼りに下る。17時C3に戻る。すぐ後ろのピッチを下っていたはずの3名は途中大きく離れ結局20  
▼チャムラン最東峰(7287m)



## ▼頂上の林 (右) とアン・プリー・ラマ



時少し前に無事全員C3に帰着。もう少し頂上へ行くのが遅れたら登れなかったかもしれない。私達は最後の最後まで幸運だった。

### 登頂記－松田靖彦

2時起床、あまり寝た気がしない。4時出発に向けて準備をする。4時50分ヘッドランプを点けてC3出発、アタックが始まる。天候は悪くない、今日一日はもちそうだ。下から見たとおり傾斜の強い雪壁をもくもくと登る。待ち受ける核心部のことを考えると気が重い。雪壁を登り詰めた所からナイフリッジが始まる、かなり切れ味の良さそうな歯が長く続いている。敗退した外国隊4隊はここで帰っているようだが気持ちはわかる。サーダー・林・東がどんどんフィックスザイルをのぼしていく。松田・竹内の順番でそれに続いて登る。ルート工作しながらのアタックなのでどんどん時間がすぎる。14時頃にやっと核心部をぬける、あとは頂上の登りだけ。松田・竹内のスピードが上がらない、少しづつ3人から離される。15時20分林・東・サーダーが頂上に立つ。それとすれ違いに10分遅れて松田・竹内が登頂、これで全員登頂。昼過ぎから出てきたガスで半分ほど視界がさえぎられている。でもローツェ、それに隠れるようにエヴェレスト、マカルー、カンチェンジュンガが見える最高の景色だ。時間が遅いので記念写真を撮り逃げるように下山する。下りの核心部のことを考えるとのんびりしてられない。松田・竹内が疲れぎみなので林は元気のいい東隊員と一緒に慎重に下山する。アクシデントで全員登頂の喜びをなくしたくない。C3の30分ほど手前でヘッドランプを点ける。19時、暗くなったC3に到着。

テントに入り、温かいお茶を飲み、無事帰れたことと登頂の喜びに浸る。疲れからウトウトし始めたのでなにも食べずにシュラフに入り寝る。6年ぶりのヒマラヤ、41歳不安はあったがなんとか登られて良かった。他の3人の隊員・サーダーに感謝。  
10月18日 快晴

昨夕からの悪天で今日はどうなるか心配だったが再び快晴で安堵する。C3を完全に撤去しC2に下る。C2は再び帰路通過するのでテント2式・食糧・その他必要最小限の装備をデポしてBCへ下る。

C3発(10:00)－BC着(16:50)

### ■帰路キャラバン

10月21日 快晴

BC撤収の日

私達メンバーとサーダーの5名は往路をたどらず再びシェルパニコルを越えてホングー氷河を下りルクラを目指す。BCの撤収作業はBCスタッフ達に任せて私達は出発。BCスタッフ達は隊荷と共に往路をたどりカトマンズに戻る。私達のコースはエベレスト街道をクープの表銀座にすれば言わば裏銀座とでも言うべきコースWバルン氷河を横断しメラ・ラ(5415m)、ザトルワラ(4693m)と標高の高い峠を越えるハードなトレッキングコースだ。おまけに途中にパッティーのない地帯を通過するためテントや食糧・生活用具一式を全て自分らでかつがなければならない。バルン側のポーターはルクラに抜けると戻るのに多くの日数と経費がかかる為ルクラには行ってくれないからだ。

今日は最短でもC2までは行かなければならない。ところが出発して間もなく松田隊員の調子が悪い。本人も懸命に頑張っているのだが息がきれて苦しくてゆっくりしか歩けないという。登頂後に高度の障害が出るとは思えない。長い高所滞在と登頂祝いの酒が肝臓にダメージを与えている様だ。毎日酒を欠かさない彼が昨夜は一人だけ全く酒を口にできなかった。いずれにしてもこのまま登り続ける事に不安を感じるが偶然シェルパニコルに向う他のトレッキンググループのシェルパがいて松田隊員の装備をコル上までかついでもらう事ができ何とかC2に着く。このまま6000mを越え

▼ナイフリッジ手前の東隊員とチャムラン



る高さに泊まるリスクを考え、体力的にきついがC2デポを回収しウエストコルよりホンゲー氷河へ下る事にする。日暮れの迫る中、何とかWバルン氷河を横断し、Wコルからは残置のF I X 300mを一挙に懸垂下降し暗闇の中、安定した氷河の雪原上にテント設営。松田隊員も何とか体調が回復し明日からの歩行も出来そうで安堵する。

BC発(8:20) - C1着(11:20~13:00) 発(13:40) - シェルパニコル(16:40) - C2着(17:10) 発(17:25) - Wコル着(17:50) 18:30テント設営泊

10月22日 快晴

テントを出ると外は別世界。ホンゲー氷河の源頭部はバルンツェ、アマダブラム、フンクー、ピーク41などが見渡せる広々とした明るい谷。バルンツェ登山のBCとしてはこちら側の方が多いのもうなずける。テントを撤収し出発。氷河はすぐに終わりプラスチック登山靴をトレッキングシューズに変えて踏み跡のしっかりした道を下る。大きな氷河湖がホンゲー側のBC(5400m)で登山を終えたスウェーデン女性隊がくつろいでいた。彼女達はスウェーデン初の登山隊で、諦め掛けていたのを私達がルートを作ったおかげで登る事が出来たと喜び、お茶をごちそうしてくれた。先が長いのでゆっくりしているわけにはいかず早々に出発。バルンツェを背にホンゲーコーラ添いに下って行く。時折ガスの切れ間にローツェ南壁、チャムランも見え、広々とした河原の中の静かなトレッキングを味わう事が出来た。チャムラン氷河がホンゲーコーラに下る所の対岸、芝の台地に今日は幕営(4800m)。5000m以下になると急に温かく

▼登頂して頂稜を下る松田・竹内隊員



なったように感じる。

出発(9:30) - ホンゲーBC着(11:00) 発(12:00) - テント場着(16:30)

10月23日 晴れ→ガス→晴れ

キャンプを出してしばらくは所々に湿地の点在する牧歌的な草原状をホンゲーコーラ添いに下る。放牧には最適かと思われるこの地には不思議とヤクの糞が全くない。つまりそれだけこの場所が生活とはかけ離れた場所だと言うことだろう。巨岩がゴロゴロ転がるロックガーデンのような所を過ぎると、トレイルは大きく尾根を回り込みメララへと通じている谷に入って行く。広い河原状の所からメララへの本格的な登りである。2時間程ガスの中、黙々と登り峠につく。ちょうどこの時ガスが切れ眼前に雪の屏風のようにドカーンとメラピークがそびえていた。メラピークの肩にある雪の峠がメラ・ラである。まだ遠い。更に2時間程登った所にフランスのメラピーク隊がBCを建設していた。ここでポーターを1名ゆずってもらい皆の荷物を減らす。ここから30分程で広い雪原状のメラ・ラ(5415m)に到着。後はただ下り続け狭い谷間にテントのひしめくカーレキャンプに着く。出発(8:30) - メラ・ラ(16:00) - カーレキャンプ(17:20)

10月24日 晴れ

カーレからはインクーコーラ添いに下る。前方に天を刺すようなKyashar(6770m)を眺めながら2時間程でタンナン村に着く。タンナンはトレッキングシーズンのみ人がいるパッティだけの村である。10年程まえに上流のサバイツォという大きな氷河湖が崩壊(地図上にはあるが…)し大きな

## ▼記念写真（スエーデン女性隊）



被害を受け、今のバッチィは復興後の新しい物ばかりである。タンナンから小1時間下った岩窟の中にゴンパがありお参りする。ここから先はひたすら広い河原歩きで、以前は右岸沿いに良い道があったらしいが氷河湖崩壊でほとんど流失してしまったと言う。2時間で松林中のコーテカルカに着く。久しぶりに森の中のキャンプだ。夜遅くまでシェルパニのハーモニカに合わせてダンスパーティーになる。

カーレジキャンプ発（9:30）ータンマン着（11:30）発（13:30）ゴンパ着（14:20）発（15:00）ーコーテカルカ着（17:20）

10月25日 くもり→雪

松林や河原の道をしばらく進むとやがて道は石楠花と竹の繁殖すジャングル帯の急頭になる。所々竹のFIXに助けられながら登り下りを繰り返す。大岩の広場にできた新しいバッチィで昼食をとっていると雨が降り始めトリカルカに着く頃には雪となった。コーテカルカ発（9:30）ー大岩のバッチィ着（12:00）発（13:30）ートリカルカ着（16:30）

10月26日 くもり時々小雨

昨日からの雪は明け方まで降り続き5cm程積もった。トリカルカから1時間強で最後の峠ザトルワラ（4693m）に着く。この峠からの下りが大変で、踏み固まった滑りやすい雪道の急降下に神経を使わされる。この下りきった所にバッチィがありこのシェルパニが我がサーダーの友人だった事もあって大休止。もう今日で終わりと言う事もあって少々はめを外してチャンを飲む。ここから30分程でチュタンガというバッチィに着き、ここで昼

食をとるが、この下りでチャンで足元よろけていた竹内隊員が転んで左足首の捻挫をしてしまう。全く酒は災いの元である。当人には気の毒だがこれが最終日で良かった。夕暮れ近くになりなんとかルクラに到着。私にとって13年振りのルクラは見違えるほどに近代的になっていた。

トリカルカ発（8:00）ーザトルワラ着（9:15）ーバッチィ着（10:50）発（12:30）ーチュタレガ着（13:00）発（15:00）ールクラ着（16:50）

10月27日

ルクラ→カトマンズ

## おわりに

今回の登山は私にとってネパールのエキスペディションピークの隊長としては初めての経験だった。結果として優秀なスタッフ、天候に恵まれ全員がバルンツェの頂きに立つことが出来たのは幸運だった。ルートを熟知したサーダーがおり、山の高さにプレッシャーを感じる訳でもなく、登山期間も3週間足らずで登れてしまった。今回はあまりにもスムーズに登山が進み、それがかえってこの登山を物足りないものにしてしまったような気がするが、今シーズン6隊が挑み4隊が断念した後私達が先陣をきって登頂できたのだから、ちょっと贅沢な思いかもしれない。この山の大きな魅力のひとつは長いキャラバンにあるのではないと思う。アルン川流域は観光化が遅れ今だに昔の良さを残している所が多い。私達は往復でシプトン・ラ、シェルパニコル、Wコル、メラ・ラ、ザトルワラの5つの高い峠を越えた。登山で充分な順化が出来ているからこそ、余裕をもって越える事ができたが、まさに山旅と登山を共に楽しむには絶好のエリアと言えるだろう。もう登り尽くされた感のするネパールの山々だが、ちょっと目線を変えれば新鮮味の残る山はあるのではないか？ヒマラヤ王国ネパールの山々はまだまだ楽しめる可能性を秘めていると思う。

次はもっとマイナーな山に登ってみたい。

どんな山と出会えるのか楽しみだ。

# 氷河の旅① ハラモシュ・ラを越えて— 2

東野 良

## 〈ついにピストルが放たれた〉

ま、こういう事は、ヒマラヤなら他のところでも同じだから、それほど気にならないのだが、何とも不快なのが、目つきの悪い若い不良3人組だ。二十歳前後と思われるが、懐手にしてテントの回りをうろつき、蠅のように離れない。懐手が握っているのはピストルだ。リーダーらしきアンチャンがついにピストルを出して、実弾を10メートルほど離れた石に向けてぶっ放した。もう一人は、肩に吊した弾帯をひけらかす。せっかくの美しい風景も、こいつらのせいで台無しだ。

翌朝、キッチンスタッフの一人が、メステントに置いていた靴がないと騒ぎだした。もしかして、と、自分の登山靴を捜したがなくなっていた。そのほかハイポーターのピッケルなども被害にあってることが分かった。メステントでスタッフが寝ているのに関わらず、隙間から抜き出されたらしい。

「この谷は貧乏で、教養もなく野蛮な連中ばかりだ。何をいっても争いになるから」とスタッフたちはあきらめ顔だ。盗られたほうが悪い、ことを荒立ててズドンとやられたら元も子もないしと、

わたしもあきらめるほかなかった。

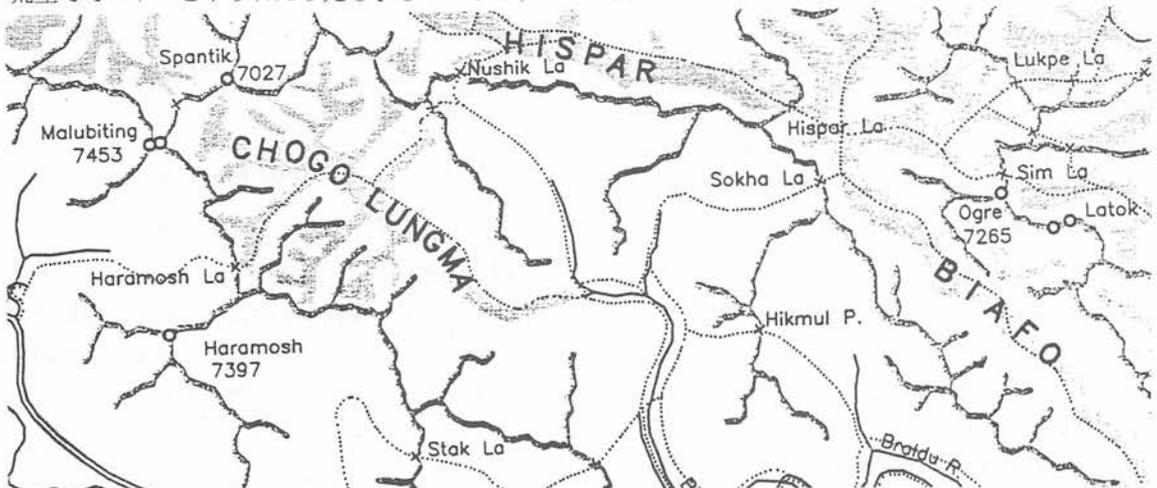
藤田さんは2日後におりてきた。9晩のハラモシュ・ラ滞在であった。星の撮影は眠気との戦いのようで、連日の徹夜でかなり疲労していた。完璧に満足のいく写真はとれなかったというが、時間切れだった。自然を相手にする山岳写真家の苦労というものがよくわかった撮影行だった。

居心地のよくないこのキャンプは一刻も早く去りたかった。藤田さんの下りた翌日、村人が気づかない早朝に出発した。あの不良あんチャンたちが中心になって、自分たちをポーターに雇えなどと荷物も担げないくせに、イチャモンをつけてくるに違いないからだ。

ハラモシュ・ラへは、マニキャンプからも上ることはできるが、この谷の人間をポーターとして雇うのは考えものだと、わたしは警告しておきたい。

クトワール湖のキャンプ場からは、しばらく大木の茂るマニ氷河右岸をたどり、氷河末端近くで左岸に移り山道をくだった。

ジープ道がかなり奥までたっしている。バルチェから迎えのジープに乗り、インダス河岸のサシに出てその日のうちにスカルドに戻った。



## ② スノーレークへ

### 〈花のデオサイ高地〉

スノーレークに出かける前に、デオサイ高地について若干ふれておきたい。

デオサイ高地は、カラコルムとはインダス川を隔てて南東の方向、インド・パキスタンの紛争の地カシミールに接する高原状の山地である。面積は40キロ四方とも80キロ四方とも書かれているが、はっきりしない。

デオサイ高地へは、カラコルムの登山基地スカルドからサトバラ湖をへて、ジープで2時間ほどで上れる。日帰りもできるが、トレッキングで宿泊滞在するとしたら、4000mを越えているので、一度は高度順化をしておく必要がある。

谷間の急な道を上りつめると、これまでの風景からは想像できないような、なだらかな高原が広がる。チベット北部のチャンタン高原を思わせる景観だ。違うのは、緑の草と色とりどりの花の群落である。

雪がとけてまもない6月は、オキナグサやサクラソウ、黄色のユキノシタの類が花の絨毯を織り成す。真夏は黄色い花をつけるネギの類が湿原を染めつくす。シオガマグク、ウルップソウ、フワソウなどの仲間も多い。

熊の生息地ということで、いつもカメラを出せる体制で歩いていたのだが、熊には出会えず、尻尾の長いマーモットとナキウサギが撮れただけだった。国立自然公園といいながら、放牧の牛や山羊が麓の村からあがってきていたのには、驚いた。

また、デオサイ高地を一望にできるデオサイトップの丘には、不粋なパキスタン軍のレーダー基地が建設中であつた。その東側、ゆるやかな谷を隔てた数10キロ先は、立ち入りがまったくできないイン・パの紛争地である。

デオサイ高原の一角を回ってブルギ・ラの峠に辿り着くと、インダス川の峡谷を隔ててマッシュャブルムやK2などカラコルムの巨峰が、波濤のように連なっているのが望まれた。足元にはスカルドオアシスの緑がみえた。

広々とした空の下に生きる高原の花と動物が、

戦火に焼かれることのないように祈りたい。

### 〈弱り目たたり目のピアフォ氷河〉

スカルドでローカルポーターたちのために毛布を買い足す。その他、日本から持っていった10人用のキャンピングテントも用意した。わたしたちは、ピアフォ氷河をヒスパールまで遡り、さらにスノーレークを見渡せる稜線に上って撮影する計画だ。

ピアフォ氷河は長さが60kmもあるといい、カラコルム、いや世界でも屈指の氷河だ。

その源頭に広がるのが、雪の湖「スノーレーク」だ。

ポーターたちには、雪上で少なくとも5、6泊はしてもらわねばならない。貧弱な装備ではポーターたちに不満がでる恐れもある。記録をみると、ヒスパールで長い日数ポーターたちに滞在を強いた隊は少なく、足早に峠を越え、雪のない場所にキャンプ地を求めている。

キャラバン出発点のアスコールでも、ポーターたちの装備を厳しくチェックした。かれらは新しく支給した靴などを家において、穴の開いたボロ靴でやってくる人が多いからだ。それでは雪に耐えられない。

アスコールまでは道が荒れていた。一ヶ所は崖崩れで一時間半あまりの高巻き、橋も一ヶ所流されていた。その度にジープに荷物を積み替えなければならない。100個の卵を運んでいたポーターが転倒して、貴重な卵を全部つぶしてしまった。アスコールで鶏を補充しようとしたが、疫病で一羽残らず死んでしまったという。いやはや、弱り目たたり目とはこのことだ。蛋白源はまずいイワシの缶詰しかない。

### 〈泥ナダレのキャンプ〉

7月21日、アスコールの先の吊橋でバルトロへの道を見送り、そのまま右岸に行く。チベットのケサル王のボロ競技場と呼ばれる砂の広場をすぎ、小尾根を越えてピアフォ氷河に下りる。この辺りはサイドモレーン上部の岩壁が崩れて歩きづらい。

この夏ピアフォ氷河に入るのは私たちが初めてらしく、トレースがないので、デブリにルートを

▼泥のナダレがキャンプを襲う（ビデオから）



探しながら進む。初日は右岸段丘上の「ナムラ」でキャンプ。真紅のヤナギランが花盛りだ。晩夏の花なのだが、暦より季節の進捗がはやい。

翌日は歩きにくいデブリを横切り、クリーンな氷の上にする。アップダウンのない氷河歩きで距離がかせげる。だが、雲行きがしだいにあやしくなってきた。ポーターたちは再び右岸のサイドモレーンに上った。

「ソブラン」のキャンプ地だとポーターたちはいうが、「ソブランはまだ先のはずだ。もっと行かないとだめだ」と写真家の藤田弘基さんは不満顔だ。ソブランからのラトック山群はすばらしく、できればそこから写真を撮りたいからだ。だが、ポーターたちは荷をほどきはじめ、燃料集めまでしているので、もっと先まで進めとはいえない状況だ。

小さな池があったが、放牧のヤクのたまり場となっていて、水は濁っていた。池に流れこむ湧水を見つけ、それを炊事に使う。

夜になって雨になった。そして翌日も止まず。ラワルビンディのエージェントに衛星電話をか

け気象の情報をとるが、パンジャブの平地は大雨で、洪水の被害も出ているという。わたしたちのいる北部山岳地帯も雨の予報で、見通しは芳しくない。

テントで読書をしていたら、外でゴォーと音がする。誰かストーブを使っているのかと思ったのだが、テントから顔を出して覗くと、なんと百メートルほど離れた沢から土石流が激しく流れ落ちてきているではないか。土石流は何波にもなって押し寄せてくる。大石がごろごろと流されてくる。上部氷河からの「泥ナダレ」というやつだ。

「でかいのがきたらやばい」。皆に声をかけ、テントのものをまとめて高台に避難する。雨も激しいが、ずぶぬれになりながらビデオカメラをまわす。土石流は30分ほど続いたが、幸いにでかいのはこなかった。しかし、テント場は水浸しになってしまった。

雨にふりこめられ、ソブラン手前のキャンプ地で四晩の滞在となってしまった。これからの日程を考えると、焦りをおぼえずにはいられない。

## 〈ビアフォ氷河は氷盤の飛行場〉

7月26日、ようやく朝の氷河に夏のさわやかさが戻った。対岸前方、雲を破って碧天を突いている岩峰が「ラトックⅡ」だった。この夏は晴れ間が長続きしない。今回の最大の目標地スノーレークで、晴れのチャンスを逃したら痛いことになる。

サイドモレーンのガレ場を下り、デブリ氷河を横切って氷河中央にでると、果てしなく広がる真っ白な氷盤である。靴底がざらざらの氷の表面にフィットして歩きやすい。氷河の幅は3km以上はあろうか。まるで、飛行場の中を歩いている感じだ。わたしは先のハラモシュ・ラの旅で靴を盗られてしまったので、スニーカー履きだがまったく差し支えない。

4日間の停滞を少しでも挽回したい。明日はなんとしてもヒスパースに到達しておきたい。キャンプ地はなるべく先にしたい、というのがわれわれの思いだった。だが、昼食後、ポーターたちが、キャンプ地の選定で、意見が二つに割れてしまった。地元アスコレのポーターたちは、昼食後1時間のところにあるマルホゴロを主張、一方チョゴルンマ氷河以来一緒にスカルドポーターたちは、われわれの意向を汲んで、「もっと先のキャンプまでいくべきだ」といって譲らない。殴りあいになりそうな剣幕で言い合っている。

ポーターの都合でキャンプ地を決められたのはたまらないから、われわれだけで先に歩き出したら、アスコレのポーターたちも重い腰を上げた。

ポーターたちが意地になったのではあるまいが、この日は結局20キロ以上の距離を稼ぎ、「カルホゴロ」というキャンプ地に夕暮近くに到達した。ゴロとは石がゴロゴロしているとの意味だそうで、図らずも日本語の「ゴロ帯」とか「〇〇五郎岳」と同じだ。氷から岩場に上がると温かい。ポーターたちは氷の上での宿泊がいやだから、この地まで足を伸ばしたのだ。

ちなみにマルホとは赤、カルホとは白という意味だ。カルホゴロは白い石のキャンプ地と言うことになる。大岩がごろごろしていて、メステントが張れる広さのものもあった。ポーターたちのキャ

ンプ地も岩の間に整地済みだったから、ビニールの覆いをかけるだけの労力ですむ。

このキャンプ地は、バインター・ブラックから延びる稜線が氷河に落ち込むところにあり、ヒスパースをどちらから越えるにしても、見過ごせないキャンプ地だ。氷河の対岸の無名の尖峰群が天をついてそびえる様は、見飽きることがない。

## 〈ヒスパースは雪の原〉

7月27日、キャンプ地から一時間ほど氷上って行くと、広大な雪の平原が広がった。高度は4600mある。スノーレークに出たのだ。正面の北方はルクベ・ラオ・ブラック(6593m)をはじめとする山々が白い外輪山のように連なって、雪原を取り囲んでいる。

巨大なクレーターに入ったような感じだ。

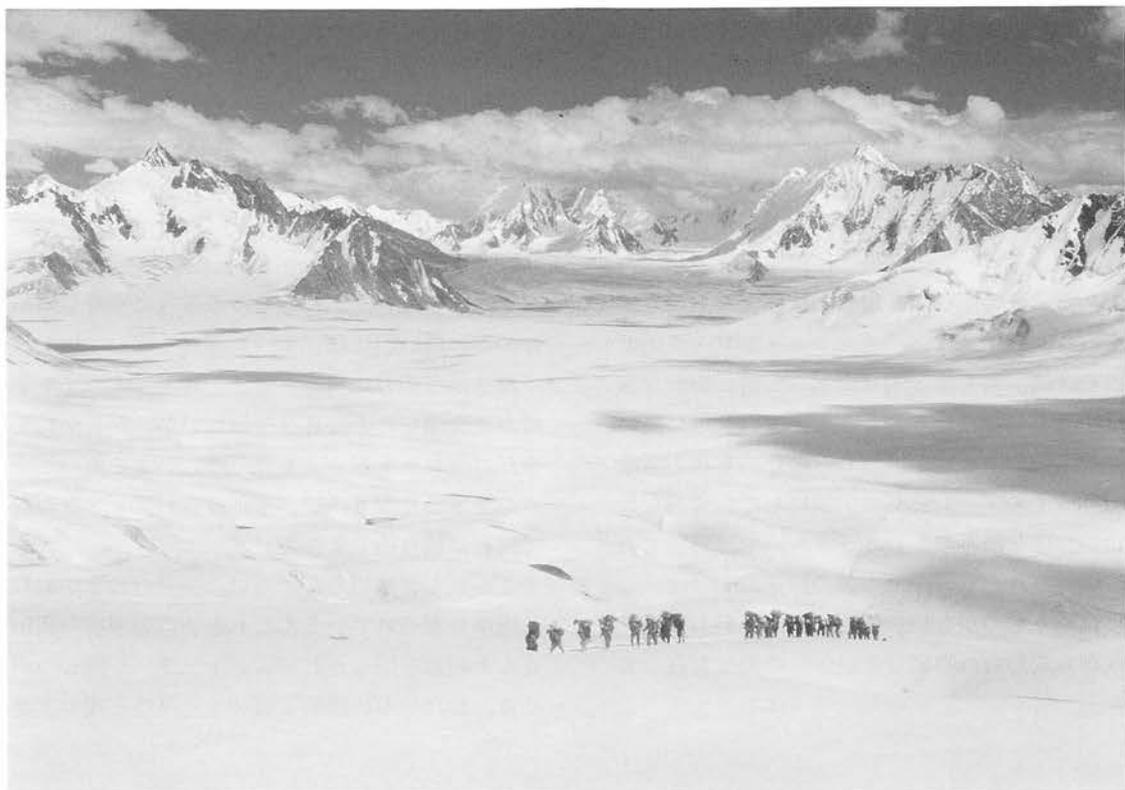
右手から流れこむ氷河はシムガンである。このシムガン氷河の南には、オーガー(Ogre=人食い鬼)との異名をもつバインター・ブラック(7285m)が聳えているはずだが、ピークは雲をかぶっていて見えない。

わたしたちは、シムガンとは反対のヒスパースを目指す。

これまでの堅い氷上と違い、柔らかな雪が20、30センチ覆っていた。時折、ポーターが小さなヒドククレバスに足を踏み抜く。大きなのがあったら大事になる。ハイポーター三人をアンザイレンさせて進めるが、ポーターたちの列がつかまってしまうので、なかなか距離が稼げない。

無人と思っていた雪原にテント群が見えた。ガイドと思われるパキスタン人が煙草を所望にやってきたので聞くと、ニュージーランド隊のベースキャンプだという。もう二週間以上も滞在して周辺の山を登っているのだという。6000m以下ならトレッキングのパーミットで済むので、登山の煩雑な手続きは不要だ。学生が主体のパーティーで、トレーニングには最適な場所だろう。さすが、優秀なヒマラヤニストを輩出している国のことではある、と感心する。彼らはスキーを多用していた。クレバスだらけのスノーレークを歩き回するにはスキーがうってつけだ。ヒスパースへの斜面も天然のゲレンデだ。わたしも持ってくればよかった

## ▼白い雪の原を行くポーターたち



と悔やむが、後の祭りだ。

彼らはフンザ側からヒスパバスを越えてやって来た。シュブールがいく筋が残っていた。

ヒスパバスへの上りは、たっぷり雪が積もっていてクレバスの不安も消えた。だが、登っても登ってもなかなか「峠」に到達しない。やがて上りなのか平らなのか判然としない地形になった。先行したポーターたちも、どこが分水界か知らずに進んでしまったのだろう、わたしたちの到着を待っていた。少し戻るよう指示し、雪を掘り下げてテントを設営した。

キャンプ地の南と北側は、フンザ側から伸び上がってくる長大な稜線「ヒスパウォール」の障壁にさえぎられてはいるが、東西に広闊な雪原となっていて、峠といわれてもピンとこない。高度は5100mあった。

### 〈千両役者 K2〉

翌朝、雪がしまっているうちに、スノーレークがのぞける尾根に向かって出発する。

雪原の東方に、「バインター・ブラック」が黒々

と立ち上がっていた。足元から頭まで岩の鎧をまとい、雪も積もらせずに聳えるいかつい容貌は、取り付く島もないといった感じだ。しかし、この人食い鬼も、1977年にイギリスのD・スコットとC・クリントンによって征伐されている。しかし、頂上から下降中にスコットが両くるぶしを骨折、悪天にもたたられて7日間の後に生還という、痛手もこうむらねばならなかった。

わたしたちはロープもアイゼンも不要のまま、二時間ほどで西方標高5500mの「外輪山」の一角に出、テントを張った。この場所からは、これまで目にできなかったスノーレークの奥の院「ルクペ・ラオ (Lukpe Lawo)」まで一望できた。

スノーレークは東西五キロ、南北10キロほどの広さといわれるが、わたしにはもっと広く思われた。手持ちの地図では、ピアフォ氷河の出口からルクペ・ラオの最奥までの距離は少なくとも15キロはある。また、岬状に張り出した尾根と尾根の間に、雪原が入江のように広がり複雑な地形をなしている。一概に幅5キロともいえない。確かな面積はわからないが、もし平原部の雪を青い染料

で染めることができたら、まさにそこは巨大な湖が現れるのである。クレバスはさざ波だ。

カラコルムの奥地に潜む雪の盆地をスノーレークと呼んだのは、1892年にこの地を探検したイギリスのサー・コンウェイである。言い得て妙である。

どうしてこのような高地に、雪の湖ができたのだろうか。スノーレークの出口はピアフォ氷河一つである。その流れ出る口は中流部よりも狭く、湖を取り囲む山々は、バインター・ブラック山群をのぞけば、雪をたっぷりまとめて常に豊かな水の供給源となっている。もともと広い盆地に長い年月で大量の水と雪が堆積したのだ。氷嶺と雪原が織り成すスノーレークの広闊にして極地的な景観は、急峻な峡谷の多いカラコルムでは異質である。ゆっくりと雪原をほう雲の影をのぞけば、ここには動くものがない。生物の息づかいもない。古代から変わらぬ静謐な光景が目の前に存在していた。

雲が多い。K2の方向も雲に閉ざされている。

雪庇を踏み抜かないように気をつけながら雪を踏み固めて湖の展望台を作り、夕方を待った。背後の西の雲もなかなかとれないまま、日没が近づいてきた。

「きょうは無理だな」と、半ばあきらめかけた時だった。自然は突如いきなり演出を始めたのだ。「人食い鬼 (Ogre=オーガ)」の異名を持つバインター・ブラックが、みるみる赤鬼に変身し始めたのだ。低い山には、もう光はなくなっていた。

はるかな東方に目をみはる。スポットライトを浴びて登場したのはK2ではないか。たしかにそうだ。ブロードピークも見える。いまや雲のベールをすっかり取り払い、千両役者がオレンジの衣で舞台に踊り出てきたのだ。

「こんなことはめったにない。夕景のK2が撮れる場所は限られているんだ」と、百戦練磨の藤田さんも興奮を隠しきれず、シャッターを押しつづける。わたしも、眼前に展開する高峰と光のドラ



▲バインター・ブラック（右）の左手奥に夕陽に輝くK2の雄姿が望まれる

マに感心してばかりいられない。ビデオのスイッチを切る間もない展開だ。ズームレンズでぐいと引き寄せると、K2は画面いっぱい。

フィナーレは10分ほどで終わった。K2も夕闇に溶け込もうとしていたが、日没後も余韻は長くつづいた。薄紅の残照がしばらくの間スノーレークの湖面を淡く染め上げて、一幕を閉じたのだ。

翌日は朝から快晴となった。スノーレークは東の「窓」から差し込む数条の光によって目覚めた。太陽がめぐるにしたがい、山々はまぶしく輝く。ただひたすら静寂のままスノーレークに時がすぎて行った。

二日目の夕方は、前日のような華やかさはなかった。だが、きれいに雲がはらわれた夜は、満天の星舞台となった。北極星をめぐる北斗七星やカシオペア、帯のようにただよう銀河やサソリ座が、スノーレークの広い空をいっぱい埋め、時とともにめぐっていく。

突如、巨大な火球が天空を切り裂いた。スノー

レークを、そしてカラコルムの山々を、真昼のように照らし出したのだ。人食い鬼も一瞬目を覚まさずにはいられなかったようだ。

明け方まで星の饗宴は耐えることなく続いた。東天にはスバル、土星、木星がきらめき、やがて山々と雪の盆地は、またあたらしい日を迎えた。幾千年、幾万年と変わらないスノーレークの営みである。

わたしたちは去りがたい思いでテントをたたんだ。ヒスパーウォールの長い稜線のかなたに、最初訪れたハラモシュが雲のように浮かんでいた。

(完)

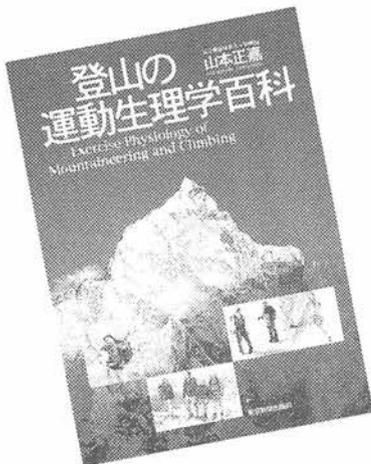
(編注)

この時の取材は4月頃「NHKスペシャル」〔星明かりの秘境〕と題して放映の予定です。

「身体の仕組みを知って、安全登山を!!」

# 登山の運動生理学百科

山本正嘉 著 (国立鹿屋体育大学助教授)



「登山で疲れる原因は何か」「中高年や女性登山者でも快適に登るためには?」「適切なトレーニングABC」「あなたにもできる高所登山」など登山全般を網羅。

初級者からベテランまで幅広い登山者を対象に、登山と健康、疲労、中高年者・女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的データをもとに解説。著者は、ヒマラヤをはじめとする高所登山家であると同時に、スポーツ生理学の専門家。

●A5判・並製 ●価格：本体2000円＋税

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎03-3740-2674(直) FAX03-3458-0689

## 地域ニュース

### 《パキスタン》

#### パキスタンの登山隊ビザについて (Mountaineering Visa)

先月号でお知らせしたパキスタンのビザ・ルール変更は、一般旅行者や、トレッキング隊、偵察隊のみのものであり、登山隊については、はっきりした詳細が内務省からも提示されていなかったため、記す事が出来なかった。その後、各省庁において、確認を取ったので、ここに改めて、登山隊の査証「Mountaineering Visa」について、説明をする。

登山隊の査証「Mountaineering Visa」は、従来通り必要である。登山隊は、在日パキスタン大使館から郵送された登山許可証を提示し、在日パキスタン大使館で必ず、登山ビザを取得する。ビザの種類は、パスポートのビザ・ステッカーの「Purpose of visit」(滞在目的)の覧を確認する事。その項が「Mountaineering」と、なっていないなければならない。もしも、一般旅行者と同様にエントリー・スタンプのみで入国した場合は、内務省で登山ビザが下りない場合があったり、取得に煩雑な手続きと、時間を要するので、必ず、入国前に取得する事。ただし、何らかの事情があり、他国経由で入国の場合は、その経由国で取得する。(例えば、ネパールでプレ登山を行ってからの入国は、在ネパールのパキスタン大使館で取得する事も、可能である。他国で、パキスタンの登山ビザを取得の場合も、必ず、登山許可証を提示する。)

また、今まで、ブリーフィング前に必ず行っていた、外国人登録が免除になった。従って、外国人登録を返却後に取得していた、トラベル・パーミットも必要ないと言う事である。しかし、パキスタン入国後、何らかの現地事情によって、ルールが変更になる場合もあるので、今までと同じように、外国人登録の手続きが出来るように証明書用写真2枚は、用意して入国する事が望ましい。

(情報提供：日・パトラベル)

## トピックス

### 高所登山「事故と環境対策研修会」

第8回目を迎えたH A J主催による恒例の「高所登山 事故と環境対策研修会」が下記のとおり開催される。日本ヒマラヤ登山界にとって「1」の年は事故多発の年である。多くの登山者が研修を受けてヒマラヤ登山を実践してもらいたい。

- 1961年 日本隊初のヒマラヤ登山死亡事故発生
- 1971年 6隊で10名が死亡し、日山協「海外登山推薦状」制度の制定のキッカケとなる
- 1981年 12隊で34名が死亡した最悪の年
- 1991年 京大隊で11名が死亡し、1隊の最高死亡

記

日時：2001年4月1日(日) 9時～17時  
 場所：豊島区民センター(東池袋1-20-10)  
 参加費：3000円  
 内容：雪崩からいかに逃れるか(中川裕) 高峰に潜む様々な危険と遭難事故例(野沢井歩) 人間の体の仕組みと高所障害(斎藤繁) テイクイン、テイクアウト(山森欣一)

### HCミレニアム・ミート開催

新世紀の幕開けを記念してヒマラヤン・クラブのミレニアム・ミートが2月3日、4日の2日間にわたり、インドのムンバイ(旧ボンベイ)で開かれた。

集会にはヒマラヤン・クラブ(HC)のDr. M. S.ギル会長をはじめクルト・ディンベルガー(オーストリア)、ビル・エイトケン(イギリス)、尾形好雄(日本)、モト・ゴバ(インド)、グンジ・トリベディ(インド)、現存する“タイガー・シェルパ”のアン・ツェリン(96歳)、ナワン・ゴンブ(66歳)、トブゲイ・シェルパ(67歳)など多数の招待者を迎え盛大な集会だった。

初日はマハラシュトラ州知事の開会のスピーチで始まり、C・ディンベルガーのスライド・トークショーが行なわれた。その後、ヒマラヤ各地を幅広く踏渉し、多くの書物を記しているB.エイトケンがヒマラヤのアプローチや旅行についてい

ろんな角度から言及。K・トリベディは迫力あるパノラマ・スライドでカイラス、マナサロワール、チョモランマなどの映像を紹介した。

2日目はC.ディンベルガーの“嵐の夏”の映画で始まった。1986年のK2の悲劇をシリアスに伝えるこの映画は来場者に深い感動を与え涙を誘った。ティー・ブレイクの後、尾形が自分の“ヒマラヤン・オディッセイ”をスライドで紹介。昼食後は1996年インド隊のギャ初登頂のビデオ(40分)があり、最後はC.ディンベルガーが<sup>みたび</sup>三度登頂してヘルマン・ブルとのブロード・ピーク初登頂からシャクスガム・オディッセイまでのスライド・トークショーで締めくくった。

会場のチャバン・オーデトリウムのホールは両日とも満員で毎度の事ながらインド人がヒマラヤに寄せる関心の深さには脱帽させられる。

記念集会の前日(2日)にはHCの通常総会が開かれ、新しい名誉会員にナワン・ゴンブ、ジョン・ジャクソン、尾形好雄、ドルジュ・ラトーの5名が推挙された。(次号にて詳報掲載)

## Books

### チョム・カンリ 微笑みの女神の峰

HAJが1999年夏に中国、チベットに派遣したサマー・キャンプ隊の登山報告書。悪天候に悩まされながら3名を頂上に送った。登山報告の他に現地の買い出しリストやテイクアウト、気象状況などが報告されている。

B5判 58頁 2000年12月31日刊

問い合わせ先：〒703-8201 岡山市四御神29-10

武部秀夫 ☎ 086-279-4710

### チベット 未踏無名峰へ

坂原忠清率いる日本教員登山隊が1998年夏に中国、チベットに派遣した登山隊の報告書。ニエンチェンタラ山群の六千メートル峰3座に初登頂した登山の様子が報告されている。この山群には多数の六千メートル前半の未踏峰がある。前記と同様に食料品の価格をはじめ多くの報告が掲載されている。また教員隊の過去の登山報告の一部も掲載されている。

B5判 230頁 1999年3月17日刊

問い合わせ先：〒404-0051 塩山市竹森4773-1

坂原忠清 ☎ 0553-32-4081

### 中国登山の手引き(第5版)

HAJ発行の第5版。手続きはもとより、地域別にそれぞれの山の入山記録なども整理されているし、中国の登山家達の紹介も載っている。

B5判 261頁 2001年2月11日刊

3000円+送料340円 HAJ事務局

### Kangchenjunga 1998

日本山岳会青年部がカンチェンジュンガ主峰を北壁から登頂した記録。登山隊は北壁を行動用酸素と高所ポーターを使用しないで攻略した。酸素は最終キャンプの睡眠用だけに使用した。結果としては登頂した5人の内、2人が下山中に死亡した。この事故の原因究明については1章を費やして報告と公開で行われた検討会の記録を収録している。その検討会で浮き彫りにされた諸問題ももっと議論されてもいいと思う。(記：山森)

B5判 177頁(内カラー10頁)奥付が無い

2000年12月刊

### 夢 はばたけ 未踏峰カシタシめざして

信高山岳会が2000年夏に崑崙に派遣した登山隊は、カシタン(6,691m)の北面から挑戦した。前年に偵察隊を派遣していたが本番では6,405mで登頂を断念した。日本からウルムチ宛てに送った荷物が10日も遅れるなども登頂断念の一因となっている。登攀隊長と秘書長の「つぶやき」にもそれぞれの本音が語られている。(記：山森)

B5判 92頁 カラー16頁 2001年1月25日

問い合わせ先：〒111-111 松本市岡田松岡

214-6 大西浩 ☎ 0263-46-3926

### 東京集会のお知らせ

日時	3月26日(月)午後7時～
内容	20世紀のヒマラヤ登山について 談論風発を!!
場所	HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

# 7,000m 峰以上の複数登頂の変遷

ヒマラヤ351号では「トータル獲得標高の変遷」を紹介した。今回紹介するのは「7000m 峰以上の高峰に複数回登頂」した人達の変遷である。

ご承知のとおり7,000m以上の高峰に登頂した初めての日本人は1956年マナスルの今西寿雄であった。では複数登頂の初めては？。それは60年アピ、63年サイバルに初登頂した平林克敏であり、平林は70年サガルマータに登頂し3回登頂のトップでもあった。その複数登頂者が70年代には、わずか20人であることを考えると、日本のヒマラヤ登山の大衆化が80年代以降に一気に加速化したことを知ることができる。

因みに世界で7,000m以上の頂に第一歩を印す栄誉は、イタリアのガイド、アレクシス・プロシュレルの頭上に輝いた。ロングスタッフに同行してトリスル(7,120m)に初登頂した1907年6月12日のことであった。(記：山森 欣一)

## ・ 2 峰登頂者のトップ20 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	平林 克敏	1963,10,21	サイバル
2	佐藤 之敏	1967, 7,24	サラグラールS
3	原 博貞	1967, 7,24	サラグラールS
4	×植村 直己	1970, 5,11	サガルマータ
5	×河津 士郎	1975, 5, 9	ダウラギリIV
6	田部井淳子	1975, 5,16	サガルマータ
7	×小川 信之	1976, 5,11	クンバカルナ
8	×加藤 保男	1976, 6,15	ナンダ・デヴィW
9	×高見 和成	1976, 6,15	ナンダ・デヴィW
10	長谷川良典	1976, 6,15	ナンダ・デヴィW
11	重廣 恒夫	1977, 8, 8	K 2
12	小野寺正英	1977, 8, 9	K 2
13	重野太肚二	1978, 5, 8	ダウラギリ I
14	河野 照行	1978,10,17	アンナプルナ S
15	宮崎 勉	1978,10,19	ダウラギリ I
16	和田 城志	1978,10,24	ランタン・リルン
17	×小林 利明	1979, 7,30	シア・カンリ
18	高橋 純一	1979, 7,30	シア・カンリ
19	小椋 成人	1979,10,10	ダウラギリ II
20	×小松 幸三	1979,10,13	ダウラギリ II

## ・ 3 峰登頂者のトップ10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	平林 克敏	1970, 5,12	サガルマータ
2	重廣 恒夫	1979, 7,19	ラトック I
3	×小林 利明	1979, 7,30	バルトロ・カンリ
4	×加藤 保男	1980, 5, 3	チョモランマ
5	田部井淳子	1981, 4,30	シシャパンマM
6	高橋 純一	1981, 8,14	ムスターグ・アタN

7	×山田 昇	1981,10,10	ランタン・リ
8	尾崎 隆	1981,10,12	マナスル
9	坂下 直枝	1982, 8,14	チョゴリ
10	×高見 和成	1982, 8,15	チョゴリ

## ・ 4 峰登頂者の推移ベスト10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	重廣 恒夫	1980, 5,10	チョモランマ
2	×加藤 保男	1981,10,14	マナスル
3	富田 雅昭	1982,10,12	シシャパンマC
4	×山田 昇	1982,10,18	ダウラギリ I
5	川村 晴一	1983,10, 8	サガルマータ
6	尾崎 隆	1983,10, 9	ローツェ
7	原 真	1985, 7,21	コルジュネフスカ
8	和田 城志	1985, 7,23	マッシュャープルム
9	田部井淳子	1985, 7,28	コルジュネフスカ
10	高橋 和之	1985, 7,28	イスモイル・ソモニ

## ・ 5 峰登頂者の推移ベスト10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×加藤 保男	1982,12,27	サガルマータ
2	×山田 昇	1983,10, 9	ローツェ
3	尾崎 隆	1983,12,16	サガルマータ
4	重廣 恒夫	1984, 5,18	カンチェンジュンガC
5	原 真	1985, 7,29	イスモイル・ソモニ
6	高橋 和之	1985, 8, 5	レーニン
7	和田 城志	1985, 8,12	ブロード・ピークM
8	近藤 和美	1986, 8,15	レーニン
9	遠藤 晴行	1988, 7,12	ナンダ・パルバット
10	尾形 好雄	1988, 7,28	リモ I

・ 6 峰登頂者のトップ10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1983,12,16	サガルマータ
2	尾崎 隆	1984, 5,19	カンチュンジュンガM
3	重廣 恒夫	1985, 7,23	マッシュャーブルム
4	原 真	1985, 8, 6	レーニン
5	田部井淳子	1985, 8,15	レーニン
6	高橋 和之	1987, 9,21	チャー・オユー
7	山本 宗彦	1988, 5, 5	チョモランマ
8	近藤 和美	1988, 8,14	レーニン
9	遠藤 晴行	1989, 7,12	ガッシャープルム I
10	高橋 堅	1989, 7,12	ディラン

・ 7 峰登頂者のトップ10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1984, 9,13	マモストン・カンリ
2	重廣 恒夫	1985, 8,12	ブロード・ピークM
3	近藤 和美	1989, 8, 6	ハン・デングリ
4	遠藤 晴行	1990, 7,26	ガッシャープルム II
5	小西 浩文	1993, 7,31	ガッシャープルム II
6	尾形 好雄	1993,10, 8	チャー・オユー
7	田辺 治	1993,10,11	チャー・オユー
8	田部井淳子	1994, 8,12	ハン・テングリ
9	山野井妙子	1994, 9,25	チャー・オユー
10	山本 宗彦	1995, 5,22	マカルー

・ 8 峰登頂者のトップ10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1985, 7,24	K 2
2	近藤 和美	1991, 8, 2	ハン・テングリ
3	重廣 恒夫	1991,11,25	ナイブン
4	田辺 治	1993,12,20	サガルマータ
5	尾形 好雄	1993,12,22	サガルマータ
6	小西 浩文	1995, 5, 9	チャー・オユー
7	田部井淳子	1996, 9,20	チャー・オユー
8	品川 幸彦	1997, 7, 7	ガッシャープルム I
9	江塚 進介	1997, 7,14	ガッシャープルム II
10	岩崎 洋	1997, 7,16	ブロード・ピークM

・ 9 峰登頂者のトップ10 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1985,10,30	サガルマータ
2	近藤 和美	1991, 8,14	ポベータ
3	田辺 治	1994,10, 7	ギャジ・カン
4	尾形 好雄	1995, 9,13	サトパント
5	小西 浩文	1997, 5,31	ダウラギリ I
6	品川 幸彦	1997, 7,14	ガッシャープルム II

7	岩崎 洋	1997, 9,29	ムスターグ・アタM
8	山本 篤	1999, 5,10	リャンカンカンリ
9	田部井淳子	1999, 8,11	ポベータ
10	名塚 秀二	2000, 7,29	ブロード・ピークM

・ 10峰登頂者 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1985,12,14	マナスル
2	近藤 和美	1992, 9,20	チャー・オユー
3	田辺 治	1995, 5,21	マカルー
4	尾形 好雄	1997, 7, 8	ガッシャープルム II
5	小西 浩文	1997, 7,16	ガッシャープルム I
6	岩崎 洋	1998,10, 7	サイパル

・ 11峰登頂者 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1987,12,20	アンナブルナ
2	近藤 和美	1994, 5,18	シシャバンマC
3	田辺 治	1996,10,14	ラトナ・チュリ
4	尾形 好雄	1997, 7,20	ブロード・ピークM
5	岩崎 洋	1999, 8,17	スパンティーク

・ 12峰登頂者 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1988, 5, 5	チョモランマ
2	近藤 和美	1995, 8,16	ヌン
3	田辺 治	1997, 7,19	K 2
4	岩崎 洋	1999,10,25	ナムナニ

・ 13峰登頂者 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1988,10,24	シシャバンマM
2	近藤 和美	1995,10, 6	ダウラギリ I
3	岩崎 洋	2000, 8,15	スパンティーク

・ 14峰登頂者 ×印は死亡

No.	氏名	登頂年月日	山名
1	×山田 昇	1988,11, 6	チャー・オユー
2	近藤 和美	1996, 8,14	コルジェネフスカ

・ 15峰～18峰登頂者

近藤 和美	1997. 5,10	リスム
	1998, 5,22	チョモランマ
	1999, 7,29	ナンガ・パルパット
	2000, 7,30	ブロード・ピークM

## ■ 寸 感 ■

山頂はどこか、登頂とはどこを登ることか、名山とはなにか、「登山」、「山岳」の世界ではいまだに「あいまい」なことが多い。(山森)

### 事務局日誌 (2月)

- 3日(土) ヤンラ・カンリ隊、ニンチン・カンサ隊合宿(於、HAJルーム)
- 4日(日) 第9回「中国登山研究会」於、豊島区民センター(36名)
- 7日(水) 山岳4団体「山岳保険・共済懇談会」報告書を関係者へ発送
- 9日(金) ヒマラヤ352号発送
- 12日(月) 中国登山協会へ2隊派遣連絡と連絡官依頼別送品照会FAX
- 14日(水) 1997年クーラ・カンリII登山隊報告書を中坪印刷へ
- 15日(木) スロヴェニア、シュトレムフェリ夫妻歓迎会(HAJ主催、於、高田馬場、酒井、山森、八木原、中川、野

沢井)

- 16日(金) 同上日山協主催(於、東池袋、山森)
- 17日(土) ~18日(日) 第39回「海外登山技術研究会」(於、八王子、山森)
- 20日(火) スロヴェニア、シュトレムフェリ夫妻サヨナラ(於、南池袋、山森)
- 21日(水) 国連山岳年協議(於、神田、山森)
- 22日(木) 国連山岳年協議(於、国連大学、山森)
- 26日(月) 東京集会(15名)

### ヒマラヤ No.353 (4月号)

平成13年3月10日印刷 13年4月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

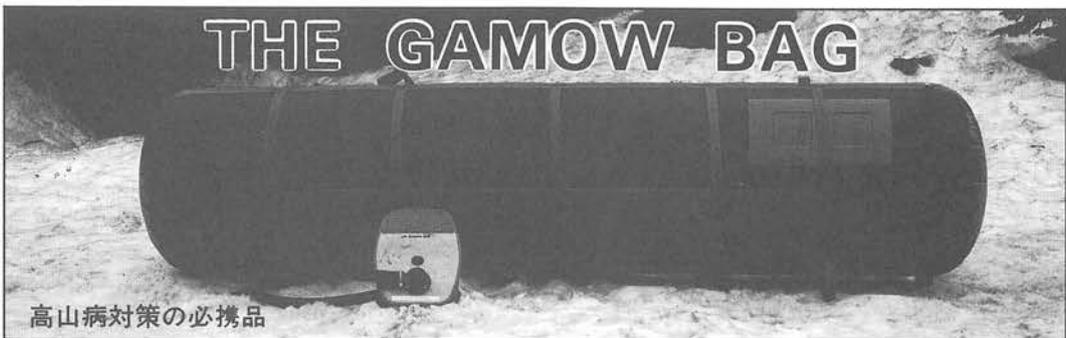
発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

### ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

# TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

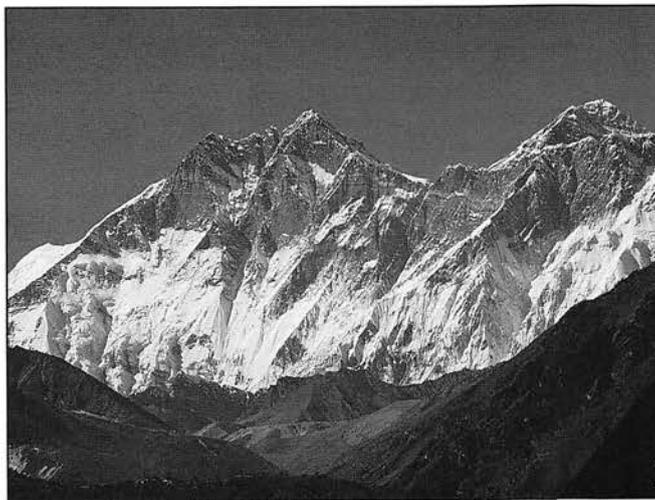


マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



## 遙かなる高みへ

トレッキング・  
登山隊の許可  
取得から航空券・  
現地手配までお引き  
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・  
パキスタン・中国・  
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・  
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1  
岩波書店アネックス5階  
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396  
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階  
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966  
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)  
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL  
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638  
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは  
フリーダイヤル をご利用下さい  
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーク3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区福岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



### ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004